

2024年4月5・6日 グランドワーク三島・視察研修体験感想文

早稲田大学 創造理工学研究科 建設工学専攻 景観・デザイン研究室

修士1年 中野太雄

植樹をひと段落終えて、隅々まで疲れ切った四肢を地面に放り投げ、空を仰ぎ、深呼吸をした時間。あのような時間はこれからの僕の人生で一生訪れないのではないかと空想してしまうほど、豊かな時間だったのではないかと思う。僕がこの2日間で過ごした時間は、どの瞬間を切り取っても忘れ難く、実際に身体を動かして自然に手を加える、自然の一部となる体験は、東京育ち・東京暮らしの自分にとってはとても骨身に沁みただけに自然を向き合う活動の実態を知る機会となった。この感想では、特に印象に残っている、見聞きした言葉・エピソードを手がかりに、今後の生き方や考え方について改められた点について書きたいと思う。

「楽しいから」という最上の動機

2日目の松毛川での植樹体験を終え、解散の間際に先生から美和さん、中田さんに投げかけられた質問に対する答えは、とても印象深かった。「この活動が続けるモチベーションは何ですか」。この質問に対し、二人とも口を揃えて「楽しいから、好きだから」というほとんど同じような言葉で答えてくれた。「楽しいから」やる、「好きだから」やるという以上の理由を表現するのに適切な言葉が見つからないというのは、言語化の限界が悔やまれるほど実はとても素晴らしいことなのではないかと、この言葉を聞いて思う。

このような言葉を僕は、目先の利益や成果を追い求めて、自分のやっていることを無理に正当化し、生き急ぐような態度を改めなさいという戒めとして受け取った。河畔林に植樹された木々が経年と共にその高さを伸ばし、やがてその木々が風景の一部となり、数十年経ってやっと自分の行いの成果を実感することができるという時間感覚の中で自然と付き合う感性は、今の自分にはまだ足りないと感じた。時間的にも空間的にも長く大いなるビジョンの一部に携わることは、この感性を磨くためのレッスンとなり得るかもしれないと思う。

自分で「現場」を見つけられるか

しばしば、自分たちの学んでいる学問体系においては、土木工学的な視座にしる、社会的な視座にしる、実空間に紐づいた思考が必要となることが特徴的だと感じることもある。その場所の価値を丁寧に拾い出し、それを引き出して伸ばし、実際に空間に落とし込んでいくデザインの出発点となる瞬間は、自分が普段何気なく接している風景を「現場」と捉えることができる感性にあるのではないかと思う。その契機を自ら作り出していくために、自分が社会のどこに問題があり、その問題を解決するためにできることは何かという問いを見つめ続けることの大切さを、渡辺さんと源兵衛川との出会いのエピソードから学

ぶことができた。その中で一つのキーワードとして「自己否定」がある。ありありとした眼前の風景が想像できるほどの語り口で紡がれる渡辺さんと源兵衛川との出会いの場面において、県庁の仕事で忙殺される日々に、ふと立ち戻った自分のふるさとの風景が、いつもと違う質感とともに見えたことは、「これからの人生どうすんだよ」という自己否定の最中であることが重要であったという。この現象は、風景を鏡としたとき、その風景を眺める自分の状態を、鏡と見立てた風景を通して再確認する瞬間であったのではないかと思う。この感性は、自分がその風景をどのくらい操作・関与できるかという立場によって左右されるかもしれないが、小さい頃から接してきた風景が、そのときだけの自分には違和感を伴って目に映ったことに面白さがあると思う。

自分はまだそのような現場に出会えていない。が、街中を歩いていて「なんだかなあ」と思う瞬間はいくらでもある。それがふるさとであるかは一旦別として、目の前の風景を自分事として捉える練習を積み、行動に移せるか。書いていて思ったが、これはまさにミッション、パッション、アクションに通ずる考え方ではないか。いずれにせよ、そのような眼差しと今の自分を見つめ直す機会を蔑ろにせず、大事にしていきたいと思う。